



TITLE:

<大會抄録>敦煌・吐魯番の古代土地制度をめぐて

AUTHOR(S):

池田, 温

CITATION:

池田, 温. <大會抄録>敦煌・吐魯番の古代土地制度をめぐて. 東洋史研究
1978, 37(3): 453-453

ISSUE DATE:

1978-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153702>

RIGHT:

行を著わす、故に變に長ず」(『太史公自序』)とあるごとく、易のうち五行をも含めて理解していたのである。『史記』は黄老とこの五行をも含めた「易」の思想にもとづいて編纂されているが、『史記』全體の構想は易と道論(道家黄老)とを學んだとする司馬談が打ち出したことを暗示している。

敦煌・吐魯番の古代土地制度をめぐって

池田 溫

中國西陲の敦煌・吐魯番二地方については、豊富な文書資料の解讀・分析を通じ、正史以下の傳存文獻では到底窺い得ぬ古代の土地所有・耕營の具體的データが知られ、均田制の施行や租佃制の實態など重要な問題に照明があてられ多くの議論が集中してきたことは周知の通りである。

近年新出文書も加わり地域の事情もおいおい明瞭になってくると、兩地の土地制度を客觀的に評價しその地方的特質を正しく位置付ける方向が當然要請される。本報告はそのためのささやかなこころみである。

大谷文書の欠田・退田・給田簿等により、開元末年西州高昌縣(吐魯番)で均田制の田地還授がひろく實施されていたと認める通説(西嶋定生・西村元佑・仁井田陞・堀敏一・楊聯陞・D. Twitchett等)に對し、根本から疑問を呈しそれを屯田文書とみなす宮崎市定説について、今日の知見に立つて再検討を試みることは、この地の給田

制の特徴を理解するに有益な作業となろう。

次に吐魯番と敦煌の土地制度の差異(田種・租佃普及度・公權の介入程度等)をとりあげその背景を考えてみたい。

なお敦煌では八世紀末から數十年間吐蕃に占領されたが、そこで基準單位ドル(突、一〇畝)による田地計量、分給、課税が行われ、後の歸義軍時代の文書に頻出する土地區劃「畦」の記載にまで影響が及んだとみられる點も、敦煌の土地制度の特殊性を示している。

一六八六年のマドラス「ブラックタウン」

事件

重松 伸司

一六八六年一月、マドラス市(マドラスバットナム)のインド人居住區Ⅱブラックタウンで、突如諸カースト集團によるハルタール(一勢罷業)が起こった。この蜂起はマドラスのイギリス東インド會社を大いに驚かせたが、わずか數日にして終熄してしまつた。

當時東インド會社はゴルコンダのムスリム領主と對立しており、商館都市の城壁構築の必要に迫られ、その費用捻出という名目でインド人に對して新税 House Tax を賦課した。この新税への反對が蜂起の發端であつた。しかし蜂起は單なる反税運動とは異なる性格を持つていたと考えられる。すなわち、新興都市マドラスに集積した、インド人商人及び織布工を中心とするギルド蜂起であり、ギル